

平成27年度 酒田出身の人物展

平成27年1月4日～平成27年12月28日



白崎 良弥（しらさき りょうや）

弘化三年三月八日生 ～ 明治二十四年六月十四日没
消防功労者

酒田伝馬町の豪商・越前屋の八代目として生まれる。越前国から移住してきた白崎家は、代々酒田町の公益、特に防火対策に力を注ぎ、火事の多い酒田の防火設備の充実に貢献した名家として知られる。白崎も同じく酒田消防組の設立に関わり、初代頭取となる。明治十四年七月の明治天皇巡幸の際は、酒田町巡幸奉迎総取締役の一人に任命される。池坊流華道を嗜み、御在所に花を活けたと伝えられている。また、馬術・茶道も嗜んだ。

明治二十四年、大浜での消防大演習の際に落馬し負傷、死亡した。安祥寺に眠る。また、日和山に白崎を称えた顕彰碑が建てられている。

★酒田と消防の歴史

江戸の町を焼き尽くした「明暦の大火」をはじめ、当時の江戸は「火事と喧嘩は江戸の華」とも呼ばれた。酒田の町も、江戸に匹敵する火災の多さであり、江戸期～明治にかけて、百戸以上を焼く大火は五年に一度起きている。このため、酒田町では消防組織“火消し方”が整えられた。寛永九年頃から活動が始まったとされる。また、酒田では前述の白崎良弥の祖先・一恭(かずやす)によって民間の消防隊が結成され、“白崎の火消し”と呼ばれた。また、白崎は貯水池や半鐘を町のあちこちに設置している。

展示品の「竜吐水(りゅうどすい)」は江戸時代から明治期にかけて使用された消火用具だが、いわば水鉄砲で、少量の水を家屋などに向け、湿らせる程度だったという。当時の消火活動は、家屋の破壊や水かけで火がさらに広がることを防ぐものであり、現代のような直接消火は、明治初期に西洋から消防ポンプが輸入され、その利便性が知られるようになってからである。

★明治二十年前後の出来事

明治十七年、華族令が定められ、国に勲功があった者が華族となれるようになった。明治十八年に太政官制が廃止され、内閣制がスタートする。初代総理大臣は伊藤博文。伊藤らはドイツ人顧問の助言をもらいながら、「大日本帝国憲法」を作成し、発布された。これにより、日本は近代国家として歩み始める。このころ、日本に電気がもたらされ、あちこちに電灯の明かりが灯るようになった。近代化が進んだ影で、足尾鉍毒事件が発生し、「公害」という新たな社会問題が生まれた。

酒田町では芝居小屋「港座」が完成。歌舞伎や演劇、活動写真・演説会に使用され、文化の発信地として愛される。



左図：故酒田消防組頭取白崎良弥君之碑（明治44年建造）



右図：第六分団の蒸気消防車（大正時代）

本町警察署脇のポンプ小屋での、本町組第六分団所属の蒸気消防車と団員たちの記念写真。「酒田町消防組」と書かれた裃纏を着用している。蒸気消防車は明治初期より輸入に頼っていたが、明治32年から国産車の製造が開始された。



門山周智（かどやま しゅうち）

嘉永二年三月二十五日生 ～ 明治四十三年五月七日没
医師

庄内松山藩士の六男として生まれる。長兄・周政の養子となり跡を継ぐ。明治三年に松嶺藩権少属兼四等録事、翌年に政庁横目付を勤める。同四年五月には兵部省土地図誌編輯(へんしゅう)掛となった。同七年に上京、緒方惟準(これよし・緒方洪庵の次男)に師事し、内科・眼科を学ぶ。その後松嶺に開業。大流行したコレラの予防の為、同十五年に「連合私立衛生会」が開設され、議長に就任。同年には飽海郡医となった。同十九年に医業講習所「淳華堂」を開設。町会議員も務めた。そして同二十四年、飽海郡の衛生状況・医療設備・病床者の扱いなどを記録した「飽海郡衛生誌」を刊行する。

明治二十七年・酒田大地震の際は、自宅が半壊した中で医療器具・薬品を運びだし、徹夜で被災者の治療にあたった。地震後しばらくの間はひっきりなしに被災者が訪れ、その数は百人を超えたという。

地域医療・衛生改善に尽力し、明治四十三年五月、六十二歳で逝去。松山総光寺に眠る。

★酒田の衛生状況

門山が記した「飽海郡衛生誌」からは、下記のように、明治中期頃の衛生状況が記録されている。現代と比べれば信じられないような環境であるが、門山ら飽海郡の医師たちの呼びかけによって、近代的に改善されていった。

- (1) 敷布団が普及しておらず、民家では藁(わら)を敷いた上に裸で寝ている。
- (2) 松嶺町における病気による死者の平均年齢は三十一歳で、呼吸器系での死亡が二十九%、消化器系が二十六%である。小児の死亡率が高い事が、平均年齢を下げる要因であるとしている。
- (3) 梅毒が流行した事から、検梅所を設置。酒田町・松嶺町の娼妓らを検査した。これは当地が交通の要所であるためで、当時東京から病原菌が入ってきたとされる。
- (4) 一部の地域では上水と下水が混在し、不潔な状態であった。

このような状況で開催された連合私立衛生会の討論会（明治十六年頃）では活発な意見交換がされ、時間が足りなくなるほどだった。



私立連合衛生会日誌

(松山文化伝承館蔵)

明治15年～18年の記録。私立連合衛生会では、庄内の医師たちが活発に衛生改善・病理について討論した。文中からは当時流行したコレラ等、伝染病の食い止めに苦心する様子が伝わる。

門山はこの日「小児ノ疾病ヲ論」として演説を行っている。



酒田大震災 石版画

(明治28年発行)

明治27年10月22日午後5時半過ぎ、酒田をマグニチュード7.0の地震が襲った。犠牲者は162人に及び、建造物には甚大な被害を与えた。

この版画は酒田に滞在していた名古屋出身の画家・恒川鶯谷（つねかわおうこく）が描いた。当時は新井田町に下宿し、地震の際に被害状況を写し取り、袋詰めにして売り出したところ、評判となったという。

★明治四十年前後の出来事

明治三十七年、日露戦争が勃発し、日本が勝利する。これにより大陸進出を進め、満州国を半植民地、韓国を植民地とした。列強国として国際社会で大きな力を持つようになったが、同時に他国との対立も目立つようになる。

このころの主要産業に生糸生産がある。機械技術の導入が進み、日本が資本主義の流れに到るなか、特に重要視された産業で、明治四十年代には世界一の輸出高となっている。

酒田町ではようやく電気事業がスタートし、電気点灯式では多くの人が集まり歓声を上げた。また、電話の普及も同時期に進んだ。当時の加入者数は百八十名であった。



川上瀧彌（かわかみ たきや）

明治四年一月二十四日生 ～ 大正四年八月二十一日没
植物学者

飽海郡松嶺町（現酒田市松山地区）に生まれる。幼いころから自然に興味を抱き、標本を作っていた。明治二十一年に鶴岡の荘内中学校に入学するも中退。その後一家で北海道へ移動し、札幌農学校へ進学。在学中、阿寒（あかん）湖の球状藻に「マリモ（毬藻）」の和名を命名した。明治三十三年に卒業、翌三十四年に熊本県農学校の教諭となり、明治三十六年には台湾総督府の技師として赴任。台湾の植物を調査研究し、数十種の新種を発見、植物学会に発表した。それら川上が発見した植物には「kawak.」と学名がつけられている。

明治四十一年に台湾総督府博物館（現国立台湾博物館）初代館長に就任する。大正四年八月二十日に、現在本館となっている建物が完成したが、翌日二十一日に四十四歳の若さで急死する。これらの功績から、現在も台湾の人々に高く評価されている。



まりも

日本では北海道・青森など、限られた地域にしか生育しない。特に北海道阿寒湖のまりもは、国の特別天然記念物に指定されている。糸状の藻が水流で絡まり合って球体になっており、触ると固い。

川上は明治30年8月に、北海道庁の気象観測の一行に加わり、阿寒湖で植物採取を行っていた。その報告書（明治31年）で、湖底で発見した球状の藻に「毬藻（まりも）」の和名を付けた。



「はな」

著：川上瀧彌 森廣

画：藤島武二 飯田雄太郎

(松山文化伝承館蔵)

明治35年1月発行。美しい花の挿絵と共に、植物の言い伝え・詩・和歌を載せている。生物学・文学の側面を併せ持つ作品。

森廣は農学校の一期下にあたり、飯田雄二郎は農学校画学講師。藤島武二は明治～昭和の洋画家で、「みだれ髪(著：与謝野晶子)」の表紙絵が有名である。

★大正期の出来事

のちに「大正デモクラシー」と呼ばれる民主化運動が活発化し、言論の自由・普通選挙の実施などが求められた。活動写真、演劇やレコードなど、華やかな大衆芸術が開花した時期でもある。

世界では第一次世界大戦が勃発。日本は限定的に参戦し、中国にあったドイツの根拠地を占領した。結果、大戦景気がもたらされ、生糸・造船業などの工業生産がうるおい、「成金(なりきん)」が多く生まれた。酒田町では陸羽西線が開通し、酒田港と共に物流の要所となる。大正9年には酒田中学校(現酒田東高等学校)が亀ヶ崎城跡に開校。都市部の民主化運動に漏れず、公会堂や劇場で、政治運動・講演会が活発に行われていた時代である。



竹内丑松 (たけのうち うしまつ)

明治十年六月二十六日生 ～ 昭和二十二年三月二十四日没

素封家・政治家

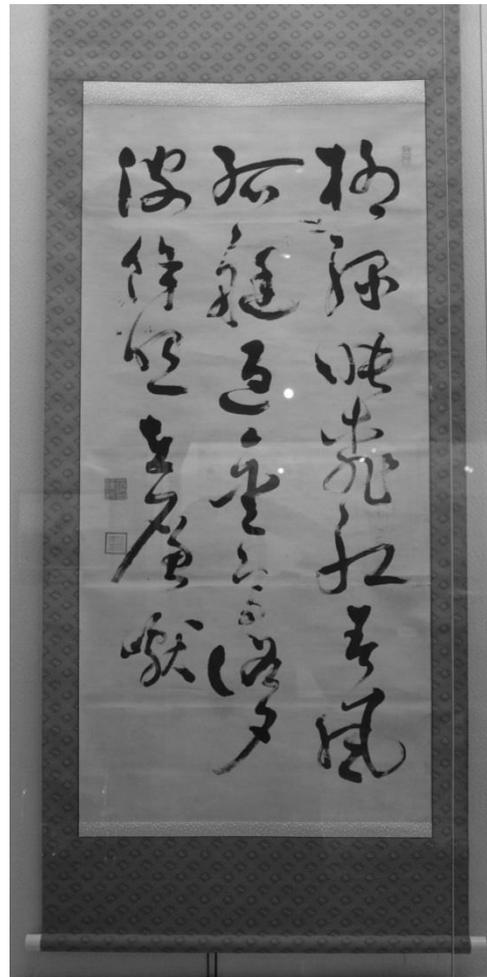
酒田米屋町の素封家(そほうか)の家に生まれる。雅号は淇州(きしゅう)。青年時から書・漢詩をたしなみ、その実力は折り紙つきだった。将棋の名人である祖父・伊右衛門の手ほどきを受けていた事から、将棋の腕は八段となり、当時多くのプロ棋士が対局の為に来酒したという。また、囲碁・剣道にも通じ、自宅に道場を建てて剣道の振興に努めた。中央から高名な剣士が指導に来酒し、剣道実力者を輩出した。旧酒田商業高等学校が、剣道の名門校になったのも、竹内の影響が大きい。

二十年以上町会議員としても活動、近代酒田の歴史上に多々登場する。雑誌「木鐸(ぼくたく)」の発行にも携わり、酒田の文化発展に大きく貢献した。前述の囲碁を通じ、犬養毅・頭山満ら政界の大物とも交流があった。

昭和二十二年に七十一歳で逝去。浄福寺に眠る。



上写真2点：竹内丑松 将棋対局風景



竹内丑松筆「五言絶句」

柳緑映棊缸 春風孤艇過
禽鳥浴夕波 餘照在層巖

★「木鐸(ぼくたく)」の時代

竹内がかかわった「木鐸」は、レベルの高い文芸誌として現在も知られている。明治中期ごろより酒田の有志によって新聞・投稿雑誌・機関誌が発行されるようになる。そんな中、総合月刊雑誌「木鐸」(明治三十九年～大正六年)は異彩を放ち、酒田在住の文人・学者、県外の有識者からの投稿文を掲載し、政治・文化・社会に向けて問題提起を行った。伊藤吉之助(哲学者)、小倉金之助(数学者)、佐藤古夢(酒田新聞主筆)、須田古龍(漢詩)など、大正デモクラシーの波に乗って、当時の酒田町を代表する文人・学者が寄稿し持論を展開した。

しかし、第九卷十一号に掲載された記事が、新聞紙条例に違反したとして大審院にかけられ、木鐸の時代は終わりを迎えた。短命で終わる雑誌が多い中、結果として木鐸は十年以上、第十一卷九号まで続いた。廃刊後、木鐸を引き継ぐような形で「群像」、「骨の木」が出版されている。



山口弘 (やまぐち ひろし)

明治二十五年五月五日生 ~ 昭和三十五年九月十二日没
和牛飼育・養蚕功労者

南平田村(現酒田市平田地区)新山(にいやま)に生まれる。山口家は代々新山大権現(新山神社)の宿坊を勤める家柄である。明治四十四年に庄内農学校(現庄内農業高等学校)を卒業、同八月に東京の蚕業講習所の助手となる。大正二年に平田に帰郷し、南平田村養蚕技術員となる。村で養蚕指導を行い、日々カイコの生育を記録した。

その後、農作物の冷害被害を予測し、畜産を村内に呼びかけ、昭和七年に南平田村有畜農業実行組合が組織した。この年、鳥取県から牛を七頭導入し、庄内で初めて和牛の飼育を開始した。和牛育成の研究を重ね、昭和二十五年に山形県初となる和牛の登録を達成した。以後畜産を庄内に根付かせる為に尽力し、「和牛の山口」と呼ばれるようになった。山形県畜産販売農業協同組合和牛部長、飽海郡畜牛畜産組合長を歴任。

昭和三十五年九月十二日に六十八歳で逝去。



山口弘に贈られた賞状

左：農商功績者 賞状(昭和19年 個人蔵)

農商大臣・内田信也より。戦時下での畜産業への貢献を称えたもの。

右：和牛登録事業普及功績での表彰状(昭和27年 個人蔵)

全国和牛登録協会会長より。山口の和牛改良の取り組みを称えたもの。

★庄内地方の養蚕

明治から昭和前期にかけて、日本の主力となった産業は「生糸生産」であり、全国の農家は副業として養蚕を行っていた。庄内地方の農家でも養蚕は盛んに行われ、家族総出で餌やり・掃除をした。庄内で採れた繭は松山にある「松岡製糸場(現松岡株式会社)」へ運ばれ、生糸へ加工された。海外でも高評価を受ける生糸だったが、戦争による輸出停止・戦後の化学繊維の台頭により国産生糸はシェアを失い、現在では生糸の生産はごくわずかになっている。あちこちに作られた桑畑は、食料増産のために畑にされ、姿を消した。

なお、庄内での養蚕は現在も続いており、国産の高品質絹として製品へ加工されている。



茂木善作（もぎ ぜんさく）

明治二十六年十二月十日生 ～ 昭和四十九年十二月二十四日没
マラソンランナー・スポーツ指導員

飽海郡豊原村（現酒田市本楯地区）に生まれる。大正二年に山形県師範学校を卒業、蕨岡(わらびおか)小学校に勤務する。のち東京高等師範学校に入り、四大校駅伝競走（第一回箱根駅伝）に出場し、優勝を勝ち取る。大正九年、同校三年在学中の時に開催された第七回アントワープオリンピックで、山形県民初のオリンピック選手となる。記録は二十位であった。大正十年の第五回極東選手権競技大会（現アジア大会）では二位を記録した。また、在学中には八〇〇メートル・一五〇〇メートル・一万メートルの日本新記録（当時）を樹立している。

卒業後に旧制水戸高校の教諭を経験、満州国に渡り大学教授を務める。昭和二十四年に日本へ戻り、日本体育協会役員・山形県縦断駅伝競走審判長を務め、山形県におけるスポーツ振興に尽力した。

昭和四十九年十二月二十四日に八十一歳で逝去。常福寺に眠る。酒田市では平成二十三年まで茂木杯ハーフマラソンが計四十五回開催され、現在のシティハーフマラソンへと引き継がれている。



←極東選手権競技大会に出場した茂木
（大正10年）
右から三人目が茂木。
マラソンレースに日本代表として出場し、
2位に入賞した。

←アントワープ五輪出場時の茂木（大正9年）

★茂木のマラソンの心得

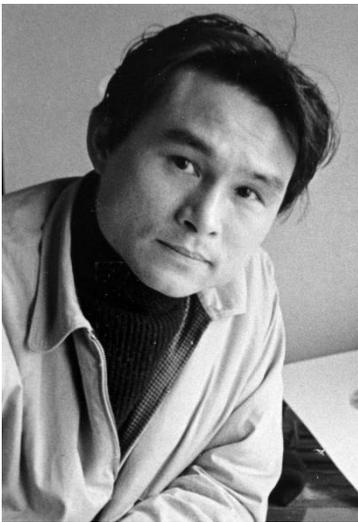
- ①足を冷やさないこと。
- ②練習後は風呂に入る。マッサージをしてうつぶせで寝ること。
- ③心中に一片の邪念を持たないこと。

アントワープ五輪における茂木のマラソン記録は二時間五十一分九秒(当時の距離は四十二.七五キロ)で、二十位となった。当日は雨が強く、茂木は体調を崩しながらの出走だった。優勝したフィンランド人選手の記録は二時間三十二分三十五秒八で当時の世界記録となり、茂木とは二十分近くの差がある。なお、現在の男子世界記録はケニア人選手の二時間二分五十七秒で、いよいよ一時間台が目前となっている。

★スポーツと酒田

明治維新後に学制が敷かれ、一、二年生の授業では「修身」「算術」などのほか、「体操」も組み込まれた。学校の校庭で授業・運動会が行われるほか、光ヶ丘の松林（当時は長坂植林と呼ばれる）では、大正期から団体などの陸上大会が盛んに行われていた。日和山公園は江戸期から市民の憩いの場として愛されていたが、大正八年に大改造が行われ、より多目的に利用しやすい公園となった。昭和八年に一週四〇〇メートルの光ヶ丘グラウンドが完成。第一回酒田市民運動会が昭和九年に初開催された。

大正五年の酒田高等女学校（現酒田西高校）の運動会種目は「綱引き」「二〇〇ヤード競走」「体操演技」のほか、「物干競走」「旗送り競走」「支度競争（仮装レース?）」などがある。



土井栄（どい さかえ）

大正五年一月九日生 ～ 昭和五十一年十月三十一日没

洋画家・挿絵画家

飽海郡一條村（現酒田市八幡地区）寺田に生まれる。本名は栄司（えいじ）。昭和九年に上京し、本郷絵画研究所に入所。岡田三郎助・辻永・中村研一らに師事する。菊池寛の小説で挿絵を担当し、以後文芸作品をはじめ、少年少女向け作品、雑誌表紙などを担当。著名な作品には「黒部の太陽（木本正次）」「ゼロの焦点（松本清張）」がある。昭和三十九年に主体美術協会の創立に関わり、会員として活躍する。

昭和四十年代にはたびたびヨーロッパへ旅行し、その際の油絵やスケッチが残る。都市部での個展開催は十三回に及び、多方面で活躍した。酒田市八幡地区の公共施設に絵画作品が寄贈・展示されている。

昭和五十一年に六十歳で逝去。東京・高円寺の寺に眠る。



左写真

作家・戸川幸夫氏との取材旅行



右写真

作家・木本正次氏との取材旅行



土井栄 作
「ヴァチカン宮殿」
個人蔵

★戦後まもなくの出来事

終戦後すぐの昭和二十一年、GHQの手により「日本国憲法」が制定された。新憲法は三原則（国民主権・平和主義・基本的人権の尊重）を明らかにした、非軍事化・民主化を象徴するものとされた。

引揚者・失業者が国内にあふれ、労働政策が推進された。それと共に全国でメーデーが復活。酒田でも第一回メーデーが開催された。昭和二十二年には人間宣言を行った昭和天皇が御来酒、日和山公園で市民奉迎会が開催された。昭和二十五年に飛島が酒田市に合併。清水屋デパートの開店・中町商店街の整備などが進み、酒田市は高度経済成長期へ繋がる活気ある時代を迎える。